

問に親切に答えてくれます。そして資源メジャーが歴史に残した成長戦略とその結果である失敗と成功の歴史を分かりやすく紐解いています。資源分野だけでなく、様々な分野で成長戦略を策定し、成功に導くことの困難さも示されています。本書は、企業に働く方々にとっても、若い読者にとっても、資源メジャーについて分かりやすく説明した良書であると思いますので、ご関心のある方は、是非ご一読ください。(渡邊公一郎)



深海底の地球科学

著者：藤岡換太郎
発行：朝倉書店 (2016/11/15)
A5判：212 ページ
定価：3,400 円＋税

平成 27 年 9 月、評者はガーナからのやや珍しいお客人を、水戸から日本地質学会が行われる長野までご案内するという機会に恵まれた。台風による暴風雨が明けた朝に発ったのであるが、途中、彼が電車のチケットを紛失する等、すったもんだの末、長野に無事到着。早速善光寺へ向かい、そこでばったりと出くわしたのが藤岡換太郎氏である。藤岡氏は、善光寺地震によって生じた寺の支柱と基礎石のズレに関し、周辺の構造地質的な背景などを踏まえつつ、即興でガイドして下さった。私との通り一遍の会話に飽いていたガーナ人地質学者はすっかり魅了されてしまい、最後には「あの博識な人は誰なんだ。きっと高名な地質学者に相違ない」と嘆息するに至った。

その博識で高名な地質学者の新作がこの『深海底の地球科学』である。

本書は、1997 年に出版された NHK ブックス『深海の科学：日本列島を潜ってみれば』の改定版にあたる。章立ては以下のようになっており、広く深海の地球科学を概観できる構成である。より詳しい節・項は、朝倉書店のウェブサイトで閲覧できる。

- 序章 地球の現在の姿と構成
- 第 1 章 大洋中央海嶺—拡大系
- 第 2 章 トランスフォーム断層—ずれる境界
- 第 3 章 オフィオライト—海洋プレートの化石
- 第 4 章 海溝—収束系
- 第 5 章 背弧海盆—海の後ろに海がある
- 第 6 章 海山と海台

第 7 章 深海底に生息する生物—太陽の光がなくても生息できる奇妙な生物群集

第 8 章 海洋研究と地球科学

終章 プレートに乗って地球を一周

本書の特徴は、なんと言っても、藤岡氏自身が二つのまなこで見て、感じ、考えたことがふんだんに盛り込まれている点であろう。そのあたりが、かっちりとした教科書仕立ての本との違いを際立たせ、最大の魅力となっている。

藤岡氏は、知る人ぞ知る、「しんかい 6500」の乗船レコード (51 回) を持ち、三大洋のすべてに潜った最初の人類である。また、深海掘削・潜航調査など数々の国際共同研究や世界一周研究航海などを経験している百戦錬磨の研究者でもある。もちろん、氏が優れた研究者であり、かつ並外れた好奇心を持っていることも重要であろうが、それだけでなく強靱でしなやかな身体と精神をも有していなければ、いずれも成し遂げられないことと想像する。さらに、時も氏に味方し、好景気、バブルなどを背景として多数の調査船・潜水艇などが建造された時代に、働き盛りを迎えている。豊富な航海・潜航の枠も得つつ、一人の人間としては考えられないほどの経験をされた。

これら長期にわたる精力的な研究生活を通し、自分の目で見えたものを自分だけのものとせず、皆と共有したいという思いは強いようだ。それは、講談社ブルーバックスの三部作 (『山はどうしてできるのか (2012)』、『海はどうしてできたのか (2013)』、『川はどうしてできるのか (2014)』) をはじめとした近年の多作に現れている。北斎が最も世に知られる作品を残したのは 70 代と言われる。著者も古希を迎えられ、一段と筆の進みもよく、いわゆる「書きまくり」の感がある。

本書は、素朴に「海は広いな大きいな」ということを思い出させてくれる良書である。読書の友として、グーグルアースやグーグルマップは必需であり、扱われる地名の位置や地形を逐一確認しながら読み進めるべきであろう。また、海底熱水鉱床をはじめとした海底鉱物資源に関する記述も多く、テクトニクスと鉱床生成との関係に興味を持つものにとっては必読と言える。編集担当がうるさいことを言わなかったためか、文章は藤岡節であり、ブルーバックス三部作と比較し、著書のクセが色濃くでている。その点、これから深海の地球科学を学ぶ若者にどのように映るのか、学生さんに様子を聞いてみたい。(伊藤 孝)